

〔大 豆〕

1. 作付の概況

本年度の作付面積は全国で 134,000ha で、前年より 2,800ha 減少し、九州でも 22,600ha で前年比 94 %で、前年より 1,400ha 減少した。減少の程度は全国、九州ともに昨年度より小さかった。この減少は、水稻の生産調整緩和で、主に水稻などへ作付転換があったためと推測される。県別では、長崎県の減少が大きく前年比 81 % (145ha 減) で、ついで宮崎県の減少が大きかった。九州で作付けの多い福岡県および佐賀県の作付けの前年比はそれぞれ 96% (350ha 減)、95 % (410ha 減)であった。なお、沖縄県での作付はほとんどない。

2. 作況の概況

本年は、梅雨前半の 6 月は降水量が少なく、6 月下旬から 7 月上旬まで降水量が多く推移し、7 月中旬以降はふたたび降水量が少なく乾燥気味であった。そのため、6 月下旬から 7 月上旬の播種は少なく、7 月中下旬が播種ピークとなった。一部で乾燥による苗立ち不良も認められたが、全体としては播種後の高温多照で初期生育が良好であった。しかし、開花期から幼莢期の 9 月 6 日に来襲した台風 14 号は強風だけでなく大雨を伴い、各県の大豆作に影響した。県別では、福岡県では中程度の倒伏が生じたが生育・収量への直接の影響は少ないようであった。佐賀県では倒伏や上位葉の落葉や落莢がみとめられ、長崎県では開花期から着莢期に台風 14 号が本土に上陸したため大きな被害をうけた。熊本県では一部で倒伏が認められ、大分県でも少から中程度の倒伏が生じ、一部では冠水害も認められた。宮崎県では台風 14 号の暴風雨被害が大きく、冠水、倒伏、茎葉裂傷が生じ、その後の天候も寡照傾向であったことから作柄は平年より著しい不良になった。鹿児島県でも倒伏や葉の裂傷などが生じて減収の要因となった。9 月上旬以降は、概して北部九州地域は記録的な高温少雨傾向で推移したが、太平洋側の南部九州地域はやや寡照傾向に推移し登熟に影響した。成熟期は、ほぼ平年並の地域が多かった。病害では、各地で台風 14 号による葉の裂傷が原因と思われる葉焼病が多発し、子実の登熟に影響が認められた。また、紫斑病の発生は、大分県の一部地域で多発したが、概ね平年より少なかった。虫害では、高温傾向で推移したため長崎県を除きハスモンヨトウとカメムシ類の発生が平年より多く認められ、カメムシ吸汁害が原因と思われる青立ちも多く認められた。以上のように九州全体としては、降雨による播種期の遅れ、台風 14 号による倒伏と葉焼け病の多発、および、高温による虫害の発生で作況指数は全国平均の 99 を下回る 92 となり、特に宮崎県は作況指数 39 で不作となった。

2005年産大豆作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	作況 指数	前年との比較					
					作付面積		10a当たり収量		収穫量	
					対差	対比	対差	対比	対差	対比
	ha	kg	t		ha	%	kg	%	t	%
全 国	134,000	169	226,400	99	△ 2,800	98	48	142	63,200	139
九 州 計	22,600	169	38,300	92	△ 1,400	94	94	225	20,400	214
福 岡	7,790	195	15,200	104	△ 350	96	126	283	9,580	270
佐 賀	7,370	193	14,200	97	△ 410	95	100	208	6,990	197
長 崎	617	134	827	88	△ 145	81	51	161	195	131
熊 本	3,100	128	3,970	71	△ 130	96	54	173	1,570	165
大 分	2,850	118	3,360	81	△ 300	90	67	231	1,750	209
宮 崎	466	63	293	39	△ 76	86	16	134	36	114
鹿 児 島	406	113	459	74	△ 35	92	66	240	252	222